国道５６号　土佐市バイパス
全線開通に係る広報について

石下（いしした）　増美（ますみ）

四国地方整備局　高知河川国道事務所　建設監督官　（〒780-8023　高知県高知市六泉寺町96-7）

国道５６号土佐市バイパスは、平成26年11月30日に全線開通した。本論文は、開通に先立ち取り組まれた広報活動について紹介するものである。

キーワード　国道56号土佐市バイパス，供用，広報，合意形成，コミュニケーション

1.　国道56号土佐市バイパスの事業概要

国道56号は、高知県の県都、高知市と四国西南地域の太平洋沿岸の各市町村を結び、愛媛県松山市に至る主要幹線道路である。とりわけ、土佐市においては、園芸作物などの農産物や紙などの工業製品の輸送、あるいは県都高知市への通勤・通学路として地域の発展に大きな役割を担ってきた。しかしながら旧国道は、2車線しかない上に、市街地を通過するため、交通量の増加による速度低下、渋滞の発生、事故の多発を招き、地域の問題となっていた。

このような状況を打開すべく、計画されたのが土佐市バイパスであり、昭和63年度に都市計画決定、平成元年度事業化、その後平成11年度より終点側から順次暫定供用がなされ、平成26年11月30日に全線完成供用となったものである。

事業概要及び平面図（図-1）を以下に示す。

【事業概要】

区間）自：高知県高知市春野町弘岡上
　　至：高知県土佐市蓮池

延長）L=4.3km

構造規格、設計速度）第4種第1級、v=60km/h

幅員構成）w=32m(5.0~1.5~2@3.5~5.0~2@3.5~1.5~5.0)

経緯）昭和63年度　都市計画決定
　　平成元年度　事業化
　　平成 6年度　用地着手
　　平成 9年度　工事着手
　　平成11年度　土佐IC接続部暫定供用
　　平成26年度　全線完成供用

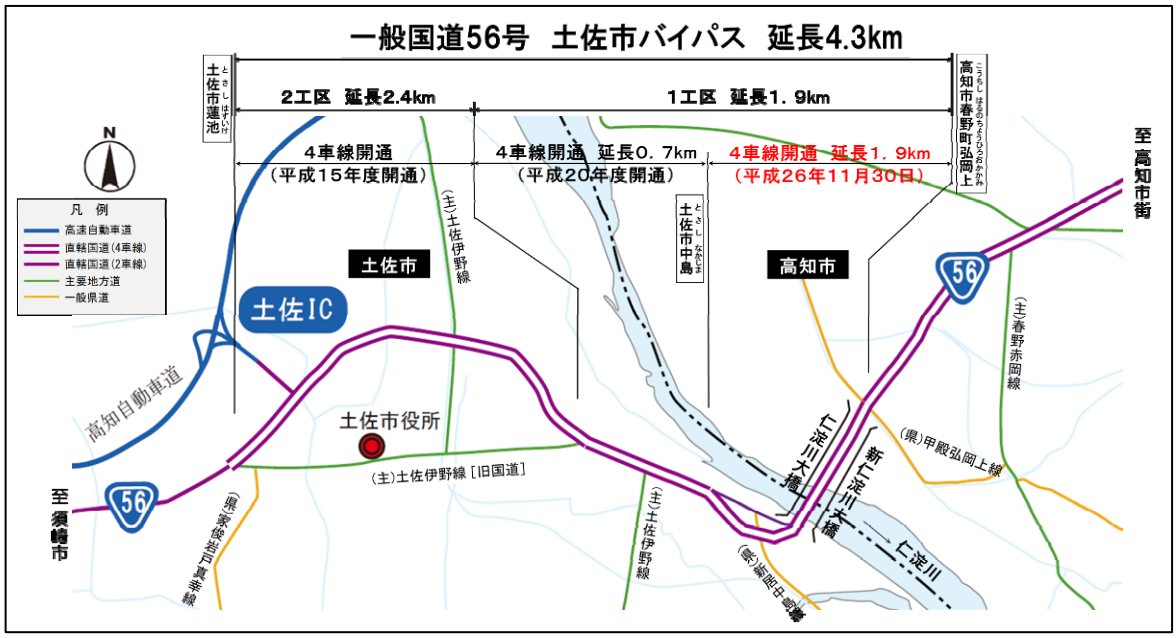

図-1　土佐市バイパス全体平面図

2. 今回の 広報活動の必要性について

ここで、今回の広報活動の必要性の背景として当時の事業進捗状況等について述べる。

図-1に示したように、土佐市バイパスは、平成20年度までに土佐市芝～同蓮池の終点側区間については完成供用がなされており、残る区間は1級河川仁淀川を跨ぐ国道56号仁淀川大橋及びその擦りつけ部の4車線化であった（図-2参照）。

本事業における4車線化計画は、現道交通を確保しながら整備を行う観点で元々あった国道56号仁淀川大橋（2車線）を活用して上り線とし、下流側に新仁淀川大橋（2車線）を新設して下り車線とする計画であった。

これに終点側からエントリーする仁淀川右岸側の土佐市中島のミニバイパス部については、平成23年4月に既に旧国道56号より交通切り替えが行われており、残る高知市春野町弘岡上～土佐市中島の工事は、平成23年度以降、新仁淀川大橋が主体となった。

新仁淀川大橋（L=616.8m）は、（鋼5径間連続合成少数桁橋＋鋼4径間連続鋼床版桁橋）からなり、河川内に10基の橋台・橋脚を築造する必要があった。かつ、支持層も終点側橋台を除き、約GL=-30m～50mの深度があり、

流水部の上部工は送り出し架設工法としては最大級（1スパン長L=100mクラス）となったことから、下部工・上部工あわせて約6年間の工期を要した。

従って、先述の土佐市中島地区の交通切り替え以降、平成23年度～平成25年度の3年間は、一般道路利用者（特に毎日の通勤通学者）からすれば、新仁淀川橋工事を横目に、最後まで2車線で取り残され、ボトルネックとなっていた仁淀川大橋上を通らねばならなかったはずで、事業進捗の実感を得ることができ難い状況であっただろうと推察する。

また、一連の広報が行われた平成25年末～平成26年度については、新橋の完成を受け、最後の仕上げである4車線化を行うために、旧橋及び新橋で交通切り替えを複数回行いながら工事を行う必要があり、道路管理者としては頻繁となる交通切り替えや、複雑となる擦りつけ部の交通方法を事前しっかりと一般道路利用者へ周知し、むやみな交通混乱を避ける必要があった。

また、前段で述べた事由からすれば、道路利用者に対しても、「お待たせしました」「もうすぐ4車線化できますよ」といったことをより積極的に伝えることで、道路利用者のみならず、周辺住民に対しても開通に対する気運を盛り上げ、道路整備に対する理解をよりいっそう深めていただくために「一般的なお知らせ」以外に実感型広報の「仕掛け」が必要であったと考える。

以上のように、土佐市バイパス整備が最終段階を迎えるにあたり、当該事業のみならず、広く道路事業に対する相互理解を深めるためには、一般的な広報のみならず、地域を巻き込んだ広報の必要性が高まる状況にあった。

図-2 土佐市バイパス仁淀川付近の空撮（全線完成後空撮～加筆）

3.　広報活動について

このような状況の中で、地元を巻き込んだ広報活動については、平成25年度半ばに床版及び防護柵が完成し、舗装工事に着手したタイミングを見計らい行うものとした。これは、鋼橋故に床版が完成するまで主に安全面の理由で多人数の一般者の見学等が困難であった、新仁淀川大橋上のスペースをを活用できるようになったためであり、交通切り替えで新橋を供用するまでに新橋上で参加型のイベントを行う方向で検討することにした。

一方で、今回のイベントの広報企画については、企画会社等外部を利用せず、職員が自ら自治体・周辺地域等の地元を足で廻り、相手方からのご意見・ご希望を伺い、また、その中で協力や参加が得られそうな内容を聞き取りながら企画立案を試行錯誤の上、実施することとした。

地元の参加者については、周辺一般住民のほか、周辺の保育園、小学校から参加をいただくことができた。

また、事前・事後の広報については、当方による記者発表（H25.12～H26.12間に全7回、イベント告知以外を含む）に加えて、土佐市広報紙面の協力（H25.8～H27.1間に全8回）を得られることができた。

一連の広報活動を時系列に整理したものが表-1である。子供達を中心とした見学会からスタートして交通切り替え時の地元主催の比較的大規模なイベントまで、「告知」→「実施」→「報告」の一連の流れを国と自治体が分担し、実施することができた。

表-1　広報活動一覧表

時期	種別	内容等	主催等
H25.8	土佐市広報	橋梁工事終了、H26年度供用目標	土佐市
H25.12	記者発表	橋梁上イベント告知	国
	イベント	園児による床版へのお絵かき 建設機械見学	国
H26.3	土佐市広報	H25.12イベント報告	土佐市
H26.5	記者発表	橋梁上イベント告知	国
	イベント	小学生児童見学 建設機械見学、排水性舗装説明外	国
	記者発表	橋梁上イベント告知	国
	イベント	小学生児童見学 建設機械見学、排水性舗装説明外	国
	開催周知	イベント告知（周辺全住民向け）	国、市
	イベント	橋上散歩（休憩所設営）	国
H26.6	記者発表	橋梁上イベント告知	国
	イベント	小学生児童見学 建設機械見学、排水性舗装説明外	国
H26.8	記者発表	交通切り替えのお知らせ	国
	土佐市広報	橋梁上イベント告知	土佐市
	イベント	橋上一般開放 緊急車両・建設機械展示 中学生演奏会 橋名板感謝状贈呈式 高知市・土佐市よさこい踊り披露 交通切り替え（通り初めパレード）	高知市 土佐市
H26.10	土佐市広報	H26.8イベント報告	土佐市
H26.11	土佐市広報	全線開通告知、市長喜びの声	土佐市
	記者発表	全線開通日発表、期待される効果外	国
H26.12	記者発表	全線開通後の交通量、旅行速度速報	国
H27.1	土佐市広報	市長新年挨拶冒頭で国事業進捗に喜びの声	土佐市

4.　地元等の反応について

今回の一連のイベント（全6回）は、派手さはないものの地元中心に約900名近いご参加をいただいた。

・H25.12　園児によるお絵かきイベント（約40名）
・H26. 5~6　小学生児童（約250名）
・H26.5　周辺住民への橋上お散歩（約270名）
・H26. 8　交通切り替え時イベント（約300名）

これは、当初のコンセプト通り、地元を対象に足で稼いだ結果であると考える。

また、マスコミの報道でも取り上げられた。

・TV　　4局延べ9回
・新聞　　2誌4回

報道内容については、地元住民の声が入った、地域密着的な取り扱いがなされていた。

道路開通前のイベントを実施する場合、一般的に今回も実施した、「路面へのお絵かき」「緊急車両・工事用車輌の展示等」については、ウケが良く、定番であるが、今回特に反応が良かったものとして、排水性舗装の体験実験を紹介する。

これは、排水性舗装と通常の舗装上にジョウロで水を撒き、その違いを体験していただくもので、子供達は興味津々の様子で、自ら試していた（図-3）。

図-3　排水性舗装の実験状況

また今回、供用することとなった新仁淀川大橋の橋名板は、右岸／左岸両岸の中学生に書いていただき、作成した。「一生の名誉」と家族一同喜んでいただき、感謝状授与時には父兄同伴でお越しになった(図-4)。

図-4 新仁淀川大橋橋名板感謝状授与の状況

見学イベントの際には、橋上であることを考慮し、作業員の休憩スペースを説明及び休憩箇所として活用したが、好評であった。こちらからの説明も聞いていただき易かったと感じている（図-5）。

図-5 橋上休憩所での説明状況

参考までに記すが、今回のイベント実施箇所は高知市と土佐市の市境にあたる。両市ともイベント時には、よさこい踊り子隊を派遣していただき、橋上で披露していただいた。賑わいが演出されると共に、両市交流の気運も高まったように感じられた。

最後になったが、参加者の状況（笑顔）を紹介する。（図-6）。

5. 本広報活動のまとめ

本広報活動の特徴としては次の通りである。

① 手づくり広報であること。
（営業は足で、企画は自らの手で）

② 黒子になること
（時には先頭で引っ張ることも必要）

③ 地元とのコミュニケーションを保つこと
（常に地元と連携を取る姿勢を）

かつては、業務多忙の中、イベント等の企画・運営を一括して外部委託する風潮もあったが、近年はその他の諸事情もあり、そのようなことは少なくなってきている。

しかしながら、公共事業を取り巻く情勢が厳しい昨今こそ、このように自らの事業の広報を地元とコミュニケーションを保ちながら企画、完遂することは、本来業務にも活かすことができるヒントを得られる可能性が高いと考えられる。

本論文の取り組みは、積極的に広報に取り組む必要性を感じることができる結果が得られた事例ではないだろうか。

謝辞：事業完了、及び手作り広報ということもあり、全般的に資料が残っておらず、論文執筆にあたっては、イベントにご協力いただいた自治体、前任者等から当時の様子をヒアリングさせていただいた。また、ご多忙の中、当時の資料を探していただいたりもした。ここに末筆ながら当時の関係者の皆様に厚く御礼申し上げる次第である。

参考文献

1) 土佐市：広報土佐 2013.8,2014.3,2014.8,2014.10,2014.11,2015.1

図-6 各イベント参加者の状況